

読書人  
出版情報

# アメリカ文学・研究書特集

## 第55回日本アメリカ文学会全国大会を機に

第55回日本アメリカ文学会全国大会に寄せて

昨今、大学教師は非常に忙しい。週末を使った二日間の学会も、スケジュールを懸命にやりくりし、時には無理を言わせて、参加する。だからこそ、日頃はままならぬ文学論議にどっぷりと浸り、仲間たちと心ゆくまで議論を戦わせたり、文学談義に花を咲かせたりする。至福の一時を持ちたいと願う。しかし、大手を振って文学が論じられる学会にもまた、抗したい時代の波が押し寄せてきているのを感じる。

私が学生だった頃、母校の広島大学はテキスト精読を非常に重視していた。これは中央の文壇から遠く離れた、小さな井の中であらばこそ許されたことだったのかもしれない。しかしその小さな井の中の蛙が、辞書を丁寧に引きながら一冊のテキストと首ったけになり、文学という抽象世界で自分なりの心象を追求することに、夜も眠らず没頭した時間は、スケジュールに追われてテキストを読み飛ばす今日では味わえない、真摯な感動に溢れていた。

国際化と情報化が進むなか、今日では、中・四国を基盤にした研究者や学生も、中央に住む人たちと変わらない国際的で学際的な研究活動を営んでいる。言い換えるなら、現在のアメリカ文学会会員はこの支部に所属しているように、日本国内やアメリカ本国はもとより、世界中で行われている研究を広く視野に収め、多彩で幅広い情報を駆使した研究活動をしているし、そうしなければ良い研究者とは見なされないに違いない。また、国境や分野を超えた多種多様な情報を援用することで、テキスト精読だけでは窺えない新しい解釈が可能になることも、事実であろう。しかしあまりに豊富な情報は、時に、取り込むだけで力を尽きさせる。そのせいか、最近では情報を盛り込むことに気を取られ、抛り所とすべきテキストと四つに組み、投げ飛ばしたり、投げ飛ばされたりしながら、泥まみれになって駆け回る、文学論ならではの楽しさがなおざりにされた論文や発表が増えているように思う。

## 文学研究本来の在り方へ

中・四国アメリカ文学会会長 新田 玲子

情報過多に振り回されてテキスト精読が疎かになりがちな現状に拍車をかけているのが、現在の大学における実学重視の功利主義的姿勢である。大学ごとに具体的な状況は異なるにしても、私たちは急増する大学業務に加え、業績の点数化と業績評価に縛られ、ひとつの論文に望むだけの時間をかけられないまま、次々と論文を作成・発表せざるをえなくなっている。こうした状況では、文系本来の形である、深い考察や分析を積み重ねた論文を創り出すよりも、理系の研究報告書のような、収集した多彩な情報をうまく盛りつけた論文を作成する方が、断然、数をこなしやすい。有利に働く。しかし私たち文学研究者が理系報告書のような論文で満足するならば、文学研究は非実用的で即金力にも欠けるからと、文学研究や文学部を不要と公言して憚らない現政府や現政府高官の思う壺にはまるだろう。

文学研究の本領は、目に見えない、もの本質において発揮される。数値化は受け付けないし、国のGPSをF1昇させる直接の道具にもならない。しかし社会を健全に発展させてゆくために、知性や感性を鍛錬し、思考を研磨し、人間性を涵養するには不可欠のものである。私たち文学研究者はこのことを誇りとし、目先の利益や体裁に惑わされることなく、国の根幹を安定させて平和で健全な社会を作り出してゆくために、文学研究本来の在り方に拘り続けるべきである。

今大会が開かれる岡山市は、人と物、文化の交流地点として時代の最先端をゆく一方、温暖な瀬戸内の中央に位置し、名所旧跡が数多く残る長閑な土地柄でもある。今大会の参加者はそうした異なる恩恵を潤沢に授かり、様々な新しい情報を積極的に交換して多に啓発されつつも、深い読みや熟考を加えた中身の濃い議論を交わして、今一度、文学研究者本来の姿に立ち返れることを強く願う。にった・れいこ氏(広島大学大学院教授・アメリカ文学専攻)